

## 月岡芳年 月百姿（つきひやくし）

太田記念美術館 24.04.03～04.29（前期） 05.03～05.26（後期）

「月岡芳年」（1839～92）は、幕末から明治前半にかけて活躍した浮世絵師で、師匠である「歌川国芳」の作風を継承した武者絵や歴史画を得意とした。

「月百姿」（1885～92年刊行）は、最晩年に精力を注ぎ込んだ傑作で、「月にちなんだ物語を題材とした100点からなる揃物」で、平安時代の美女や戦国時代の武将たち、あるいは幽霊や妖怪など、描かれるテーマは驚くほどヴァリエーションが豊で、今回、全ての作品を前・後期に分けて展示がされている。



月岡芳年《月百姿（つきのひやくし）玉兎（ぎょくと）孫悟空》1889年

中国の『西遊記』の孫悟空が人間に化けていた玉兎（月の兎）を見破ったという話より、唐の三蔵法師「玄奘（げんじょう）」がインドへ仏典を取りに行く途中、孫悟空、猪八戒、沙悟空の三徒士を従え、妖怪、怪物を退治する話。

月岡芳年《五条橋の月（牛若丸）》1888年

ひらりと飛んで扇を投げる一瞬を切り取る牛若丸の名人の様子は、動きに合わせた衣服の表現に鮮烈な赤も印象的で、版画の技巧や色にこだわりがある。

月岡芳年《源氏 夕顔巻》1886年

夕顔ははかないものの例えで、夕方に花は咲くが翌朝にはしぼむ花である。本作は、「光源氏」が薄幸の女性とめぐり合い、物の怪で女性が霧のように消えてしまった無念さを著わしたもので、男女の確執と哀れさを説いている。